

NPO 法人住まいのホームドクター／設計者の会
460-0006 名古屋市中区葵1-27-32 カイフビル7階

HD ニュース

No.14
2014.2.15

今後の予定／於：事務局会議室

- 2月18日(火)18:00～ 相談委員会
- 2月18日(火)19:00～ 研修会
- 2月20日(木)19:00～ 木造技術研究会
- 3月18日(火)18:00～ マンション大規模修繕研究会
- 3月18日(火)19:00～ 研修会
- 3月20日(木)19:00～ 木造技術研究会

減災から思うこと

副理事長 新野修一

2月11日(火)の祝日の午後、名古屋都市センターで行われた「ナゴヤ版減災まちづくりを考える」というシンポジウムに出席した。「ナゴヤ」は名古屋市を中心とする都市圏を示している。主催は名古屋都市センターが事務局を務める産官学民で構成する減災まちづくり研究会である。座長は研究会委員長の名古屋大学の福和教授で、地元の大学関係者が中心となりコメンテーター等を務めた。出席者は100名を超え、中央に口型に机を並べ、15人のパネラーが並び、周囲を参加者が取り囲む車座で自由な討論会を演出した。名古屋市が「南海トラフ巨大地震の被害想定について」を発表したのが約1週間前であろうか。時宜を得た企画である。減災とまちづくりを結び付ける方法を学ぶ良い機会となった。

討論会は「ワークショップ報告と意見交換」及び「ビジョン紹介と意見交換」の2部構成である。前者は、2030年に南海トラフ巨大地震が発生すると仮定した時、港区築地地区を対象エリアとしてそれまでに行うべき備えを検討し、事前準備の課題を探るものである。地元グループ、学生グループと行政グループの各6名の3グループがまち歩きとワークショップを行い、その概要を研究者が説明し、コメンテーターが意見を述べた。グループにより視点が異なることから、「当たり前」を見逃さず「身近」に問題意識を持つことで減災の意識を育て、その「当たり前」の地域を継続させることがまちづくりにつながることになる気がされた。後者は研究会がまとめた「ナゴヤ減災まちづくりビジョン」の説明と意見交換である。ビジョンの目的は2050年頃のナゴヤの望ましい姿を念頭に減災まちづくりの方向性を示すことにある。南海トラフでの地震は100～150年間隔で発生していて1944年の東南海地震が最も近いそうで、2050年頃を目標にする根拠となっている。

木造密集地区や浸水・液状化想定地区等でのまちづくりの考え方やリニアに起因する名古屋駅地区の大改造等のナゴヤの持続的発展に向けた重点方針を示し、減災まちづくりの推進に向けた取り組みや仕組みを提案している。特に地域力を向上させるためには、NPO等の効果的支援を進めていく必要性も指摘されている。本会でこれから出来ることのひとつに減災に向けての活動もテーマに挙げられている。今後の議論の深まることを期待したい。

とはいえ、まちづくりの様相は変わった。10～20年前までは商店街の活性化、景観、歩行者道路に代表される道路及び交通問題等をトリガーにまちづくりの議論が始まった。何故か建築家は余りお呼びではなく、商業、交通及び都市計画のコンサルタントがメインだったように思う。そして、今は都市防災の研究者が牽引し、災害被害の軽減に加え、被災後の復興までを含めて事前に検討する取り組みを踏まえた「事前復興」を行うべきだと提案している。この事前復興は地域の課題であるとともに個人の課題ともなる。我々は住まいをクライアントの要求に応じて、機能と構造と環境とデザインとコストの「バランス」の中に見つける。そして再来する巨大地震を思うとき、構造が特化する。その意味を考えて、「事前復興まちづくり」の展開を眺めながら、この時代の住まいづくりの「バランス」を再考し、「事前復興住まいづくり」のイメージを描けるようになりたいものである。ただ、「減災まちづくり」という表現は多少気になる。「減災」は必要だが「まちづくり」は多様でなければならない。「病気になる生き方」より「健康な生き方」の方が前向きではないか。時間と場所のアイデンティティを踏まえた「まちづくり」が「減災」に注視しながら多様に展開されることを期待したい。

1月11日、法隆寺の堂宮大工西岡常一氏の唯一の内弟子として知られる小川三夫氏の講演会が名古屋都市センターでありました。聴講は抽選で、150人の定員に対して450人の申し込みがあったそうです。みなさんの中にも出掛けられた方がいるかと思えます。

講演タイトルは、「不揃いの木を組む―時代を超えて受け継ぐ技と心―」。高校の修学旅行で法隆寺を訪れた小川氏が、1300年も前にこんなに大きな材料をどうやって運んだのか、塔の部分はどうやってあげたのかという素朴な疑問から宮大工に興味を持ち、自分もこんな仕事をしたいと西岡常一棟梁のもとを訪ねるところから話が始まりました。(このあと、小川氏がどのようにして弟子入りを果たし、現在の「鶺(いかるが)工舎」をつくって弟子をとるまでになったかは、同題の書籍が出版されているのでここでの紹介は省きます。)

講演で小川氏は、「(西岡棟梁の弟子時代と同様に鶺工舎でも)新弟子は飯をつくり掃除(共同生活)をする。道具を持てるようになるには、ただただ刃物を研ぎ、先輩の仕事を見るのみ。弟子達は性格も技の習得も感性も育ってきた環境もみな違い、鶺工舎では急がせない。じっくり一つ一つを習得していく。(及第点でも進級できる学校とは違うため、やめていく者もいる。)求められているのは常に精一杯の仕事であり、満足がいくまでの仕事をしないと千年もつ建物は維持できない。」

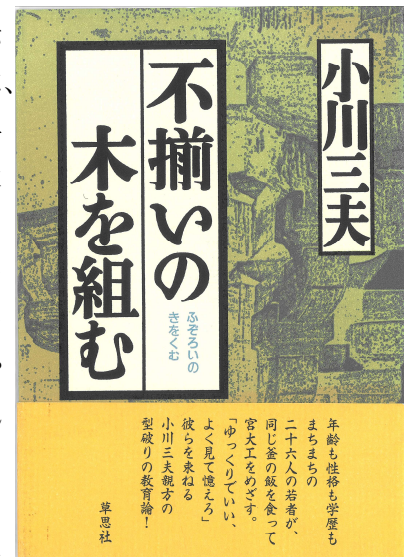
「作り上げるから丈夫で美しい建物が建つ。均一なものや均一な人材などないのに、そう考えたほうが楽だからと均一をいいものとするのは効率

優先の企業の論理。マニュアルをつくれればそれでいいという判断が生まれてしまう。人も組織も生もの。腐らせないためには常に不揃いがいい。」と説いていました。

縦引きの鋸も台鉋もない時代の法隆寺の創建では、楔で割って材をつくり、柱や梁、斗拱をつくるので、ひとつとして同じものはありませんでした。不揃いの部材を木の性質にそつてうまく組み合わせていたからこそ、1300年の時代を超えて建ち続けていることができるのでしょう。

講演を終わるにあたり「ちょうな」で木を実際に削ってみせていただきました。透けるように薄くて細い鉋くずが一本、するすると剥がれていくと、会場には木の香りが広がって木造現場にいる気分になりました。

創業当初の唯一神明造を現在に伝える伊勢神宮では、20年ごとの式年遷宮で木造の継承を続けています。木造建築の遺産の伝承に必要なものは、個々の知恵や技ではなく、それらを総持ちでつくるという精神と、まとめる棟梁ではないか、と思いました。



委員会・研究会等報告

2014年2月

■木造技術研究会 1/16 19:00~21:00
「長期優良住宅」事例紹介。「ヤマベの木構造」再講習。次回以降の研究図書を選択について 等。

■マンション大規模修繕研究会 1/21 18:00~19:00
某マンション大規模修繕コンサル業務依頼についての提出資料の確認 等。

■研修会 1/21 19:00~21:00
「最近の建築金物事情」講師:(株)タナカ

■福祉医療研究会 2/4 19:00~
研究会の今後について。

■役員会 2/5 19:00~21:00
各委員会報告。収支状況。事業活動の開拓 等。